

[研究ノート]

談話標識としての指示表現「そりゃ」の機能について*

小川典子

This paper investigates the function of *sorya*, which is thought to be a contracted form of *sorewa* derived from the phonological merging of *sore* (“that”) and *wa* (topic marker). It is claimed that *sorya* has two kinds of usage, an indicative use and a non-indicative use. Unlike indicative *sorya*, which refers to an event in the preceding discourse, non-indicative *sorya* functions as a discourse marker that indicates a particular subjective meaning of the speaker. On this latter use, *sorya* signals that the utterance following *sorya* concurs with the assumption in the preceding utterance and further that it encodes the meaning ‘if P then Q’: it evokes the existence of an antecedent P and suggests that the utterance following *sorya* is a consequent Q which naturally follows from the antecedent P.

キーワード： 談話標識、指示表現、主観的表現

1. はじめに

談話標識 (Discourse Marker) と呼ばれる表現は、Schiffrin (1987) による草分け的研究に始まり、近年では文法化や主観化との関係で、接続詞や間投詞を主な対象として歴史的発達の観点からの研究も行われている (Traugott 1995; Brinton 1996; Traugott and Dasher 2002; メイナード 2004; Onodera 2004; 小野寺 2011)。談話標識に関しては非常に多くの研究があるが、どのような要素を談話標識と見なすのかについての合意は研究者間で得られておらず、その定義も様々なようである (Jucker and Ziv 1998)。そこで本研究では、これまでの研究を踏まえた上で談話標識をゆるやかに定義している高田・椎名・小野寺 (2011) に従い、談話標識を「話し手の考え (判断)・意図・動きを、コミュニケーションの相手である聞き手に伝え、会話 (談話) の意味を理解する手助けとなるもの」とする。

* 本稿は、小川 (2010) の一部に加筆・修正を加えたものである。修正の際、細部にわたり丁寧にご指導くださった林宅男先生をはじめ、査読委員の先生方、編集委員の先生方に心より感謝申し上げます。

そして談話標識としての現代日本語の「そりゃ」の機能を明らかにし、そこに主観的性質が認められることを示していく。¹

2. 「そりゃ」の用法と種類

2.1. 「そりゃ」の用法の先行研究

本研究で考察対象とする「そりゃ」は、ソ系指示詞を含む「それ」という指示表現に主題や対比を表す助詞「は」がついた「それは」の「れは」の部分が音韻融合（「re + wa → rya」）によって生じたものであるとされる（川瀬 1992: 6）。「それ+助詞」で定着している表現としては、他にも「それが」「それを」「それに」「それで」等があり、「接続詞」として研究が進められている（浜田 1993; 飛弾村 2005; 庵 2007）が、本研究で扱う「そりゃ」とその音韻変化前の形（以下、「原形」と呼ぶ）である「それは」に関しては、これまでほとんど意味・用法の記述が行われていない。以下では、「そりゃ」と「それは」を扱っている数少ない研究として川瀬（1992）、庵（1995）を概観する。

川瀬（1992）は縮約形の一環として「こりゃ（あ）/そりゃ（あ）/ありゃ（あ）」を扱い、「縮約形「こりゃ」は、事物のみでなく「こりゃ困った」のように事態・状況等の取り立てにも広く用いられる」（*ibid.*: 17）のものであるとし、その意味機能を「提題」としている。しかし、ここでは、「こりゃ / そりゃ / ありゃ」という縮約形が事態・状況等の取り立てにも広く用いられることを指摘している他は、具体的な分析は行われていない。また、そもそも助詞「は」は取り立て助詞であるが、それが縮約形の一部になることによって「は」が持つ取り立て機能がどのように変容したのかも明らかにされていない。

庵（1995）は「ソノ N」と「ソレ」を比較し、その違いを考察する中で、「ソレ」にはモーダルな用法と言える例が見られることを指摘し、そのような例の特徴として、他に「これは」や縮約形「そりゃ」が使えることの2点を挙げている。

(1) A: Nが大麻で捕まったの聞いたか?

B: a. ああ。{それは / #これは / ?そりゃ} さっきデスクから聞いた。

b. {それは / これは / そりゃ} 大変だ / 驚いた / 事件だ。

(庵 1995: 636 (一部形式を変更して引用))

このモーダルな用法とは (1B-b.) に見られるように、述部に驚き等の話者の感情（先行内容に対する話者の態度）が明示されている場合を指す。庵は、「そりゃ」がモーダルな用法

¹ 本研究では、「そりゃ」「そりゃあ」等のバリエーションをまとめて「そりゃ」と表記する。また、方言差については考察の対象外とする。

を持つことを示唆しているが、その指摘は「そりゃ」の意味・用法の一端を明らかにしたに留まっており、それ以上の詳しい分析は行われていない。

2.2. 「そりゃ」の用法の種類

本節では、「そりゃ」をその原形である「それは」と対照させることで、「そりゃ」が「それは」の単なる縮約やスタイルの違いにとどまるものではなく、異なる意味を持つものであることを示しながらその用法を分類し、本研究で扱う対象を明確にする。

「そりゃ」「それは」には、述部の表す事態（イベント）の参与者（動作主体や動作対象等）になっている用法と、述部の表す事態の参与者になっていない用法がある。² 文構造の観点から言えば、前者は、後続発話において対応する明確な述部がある用法であり、後者は対応する述部がない用法である。本研究では、益岡・田窪（1992）にならい、前者を「補足語用法」として言及する。後者に関しては「談話標識用法」として言及する。³

次に、「そりゃ」と「それは」の補足語用法（(2)と(3)）と談話標識用法（(4)と(5)）について、事例を挙げて説明する。

- (2) 空襲中東京の家で彼女が火に囲まれて危く助かった話を聞き、「そりゃよかったね」と答えながら、ふとその時彼女が死んでしまえばよかったと思い、私は自分の心に驚いた。 (大岡昇平『野火』)
- (3) 「ケー・エヌ丸ですか。今はあれはつくっておりません。あれはもう古い薬ですから」「古い？ そんなことございませぬ。お父様はあれでどんな患者さんだってお癒しになりました。(中略) 康三郎さん、あの薬のつくり方、処方はわかること？」「ええ、それはわかっております」 (北 杜夫『楡家の人々』)
- (4) 「驚きましたね。玉岡先生が無資格だとは……」「驚くことはないさ。あいつは、そういうやつなのだ。」「でも、わたしには文部省のわる口を言っていたんですからね。」「そりゃ、あいつは文部省のわる口を言うだろうよ。なんと検定を受けたって、通ったことがないんだからな。」 (山本有三『路傍の石』)
- (5) なぜならば、私たちの周囲で野球のリーダーたちは、ほとんど不良であるか、または不良がかった少年ばかりだったからだ。こんな事を書くと、おれは不良じゃない野球少年だった、と抗議が出るかも知れない。それは確かに真面目な

² 「述語が表す事態の参与者になっている」というのは、例えば「太郎がノートを買った」という文において、「太郎が」と「ノートを」が「購入」という事態の成立に必要な動きの主体と対象を表すように、述部が表す意味を補う働きを担っているということである。これは、「命題の一部になっている」「動詞の項になっている」と言い換えることもできよう。

³ ただし、これら2つの用法は明確に判断できる場合ばかりでなく、用法の解釈に揺れが生じる例もあることに注意されたい。

野球少年や、野球部員も少なくなっただろう。しかし、野球の花形選手やボスが、少年達の日常でも、やはりボスである場合が多かった事は否定出来まい。

(五木寛之『風に吹かれて』)

補足語用法では、基本的に「それは」が用いられるが、(2)に見られるように、話し言葉や、特に俗語スタイルにおいては「そりゃ」も使用される。この俗語スタイルが出やすい場面としては、感情がストレートに出る場面(庵 1995: 636)や、話し手、聞き手が親しい場合が考えられる。⁴これは以下の作例からも示される。

(6) A: 最近は図書館でCDが借りられるらしいよ。

B: a. {そりゃ / それは} 便利だね。

b. {?? そりゃ / それは} 知らなかった。

c. {そりゃ / それは} 知らなかった!

Bの発話中の「そりゃ」「それは」は、Aが言った「最近図書館でCDが借りられること」を取り立てており、述部ではそれに対するコメントが述べられている。「それは」を用いた場合は述部にかかわらず自然である。しかし、「そりゃ」は、(6B-a.)のように述部が話者の感情を表すものであれば自然であるが、(6B-b.)のように、それ自体では特に感情を表す表現とは見なされない「知らない」の場合は不自然である(ただし、(6c.)のように感嘆を伴って、「驚き」等の感情を表す場合は自然になる)。

一方、談話標識用法では、基本的に「そりゃ」が用いられる。(5)のように、書き言葉や丁寧さが要求される場合においては「それは」も使用されるが、この場合、書き言葉では「確かに」等の表現が共起する、話し言葉では「それは」の部分がプロミネンスを伴って発音されるといった特徴が見られる。また、談話標識用法では、補足語用法とは異なり、「当然 / もちろん」という意味が感じられる点も特徴的である。

以上のことから、「そりゃ」と「それは」の用法上の特徴は以下のように示すことができる。^{5,6}

⁴ 東京下町方言では、縮約形の使用がデフォルトとなっているため、本研究で容認度が低いと判断したものについても問題なく容認される可能性が高い。

⁵ 上で見たように、「そりゃ」の補足語用法は述部に感情の表出が必要で、「それは」の談話標識用法は特定の共起表現が必要であることと発音の特徴が、それぞれの用法の自然さを保証する条件として存在している。このことから、「そりゃ」は談話標識用法、「それは」は補足語用法が基本であると考えられる。

⁶ 「そりゃ」には間投詞的用法、副詞的用法も見られるが、本稿では扱わない。この2つの用法の具体的な事例と特徴に関しては小川(2010: 54(注4, 6))を参照されたい。

「そりゃ」	談話標識用法 > 補足語用法
「それは」	談話標識用法 < 補足語用法

図1 「そりゃ」と「それは」における用法分布概観

なお、「そりゃ」が補足語用法であるか、談話標識用法であるかを分ける基準となるのは、それが後続発話の中で、述部を内容補足する関係にあるかないかである。下の例(7)では、「知らない」という述部の補足語として「そんなこと」を挿入しても「そりゃ」の使用に影響を与えないことから、「そりゃ」と「知らない」は補足語、述部の関係にないことがわかる。この例における「そりゃ」は「最近図書館でCDが借りられること」を取り立てておらず、補足語用法ではなく、談話標識用法である。

- (7) A: 最近図書館でCDが借りられるんだよ。知らないでしょ。
 B: {そりゃ / ??それは} そんなことは知らないよ。

3. 「そりゃ」の談話標識用法に焦点を当てた分析

まず、談話標識が持つ基本的な特徴としては、(i) 命題内容を(ほとんど)表さない、(ii) 文頭にくることが多い、という2点が挙げられることが多い(Schiffrin 1987; Brinton 1996)。「そりゃ」の場合、(i)については、例文(7)で示したように、後続発話の述部の補足語となっていないこと、(ii)については、(7)の例文において、談話標識としての「そりゃ」が不自然になることからその特徴が確認できる。⁷

- (7') A: 最近図書館でCDが借りられるんだよ。知らないでしょ。
 B: ??そんなことは知らないよ、そりゃ。

また、談話標識の具体的な機能については、加藤(2001: 63)は、次の6つを挙げている。

- ① 先行する発話との論理関係を表すもの。
- ② 導入される発話の種類を先取りして示すもの。
- ③ 発話の確信度や認識のあり方などを予告する機能を持つもの(モーダルな要素)。
- ④ 知識管理に関する理解などを示したり確認したりする機能を有するもの。
- ⑤ 発話に注意を向けさせる機能を有するもの。

⁷ これより先の議論における「そりゃ」は全て談話標識用法であり、補足語用法ではないことに注意されたい。

⑥ 非自己発話（相手の発話）の受容のあり方について予告する機能を持つもの。

下の議論で示すように、「そりゃ」は、これらの機能についてもそのほとんどが当てはまる。すなわち、「そりゃ」は、それに先行する想定内容と一致する発話が後続することを先取りして示す点で②を、先行する想定が当然帰結されるような根拠の存在を示唆する点で①を、「そりゃ」に後続する内容に関して「当然/もちろん」という確信や認識をもって発話される点で③を、会話の当事者の間に存在する何らかの想定を前提とする点で④を満たしている。以下、これらの機能について詳しく述べる。

まず、談話標識の機能の②について見ていく。「そりゃ」の補足語用法では、話者の感情など、先行内容に対する話者の態度が述部に表れているかどうか容認度にかかわっていた。一方、「そりゃ」の談話標識用法の自然さには、下の例が示すように、「そりゃ」を含む後続の発話内容が、「そりゃ」が発話される以前に会話の当事者の間に存在する何らかの想定と一致するか否かが関係すると言える。次の例を見てみよう。

- (8) A: 最近図書館でCDが借りられるんだよ。知らないでしょ。
 B: a. そりゃ知らないよ。
 b.??そりゃ知ってるよ。
- (9) A: 最近図書館でCDが借りられるって知ってるよね。
 B: a. そりゃ知ってるよ。
 b.??そりゃ知らないよ。

「図書館でCDが借りられること」について、(8)の場合、Aは「Bは知らない」という想定を持ち、(9)の場合、Aは「Bは知っている」という想定を持っている。いずれの例においても、「そりゃ」が自然となるのは、Bの応答がAの想定に沿うものである場合である。つまり、「そりゃ」は、先行する想定内容と一致する内容が後続することを示すものであり、導入される発話の種類を先取りして示しているという点で、上で示した談話標識の機能の②にあたることが確認できる。⁸

次に、①の機能について見ていく。この談話標識用法の「そりゃ」を用いると、それに後続する内容((8)では「知らない」、(9)では「知っている」)が当然のこととして帰結されるような根拠が存在することが強く示唆される。⁹ (8)、(9)の例で暗示的であったこの

⁸ これを話者間の発話との関係の観点から見れば、先行する想定内容に対して肯定的な応答が発話されることをマークするものであると言え、その点で談話標識の機能の⑥を満たしていると言える。

⁹ 先行する想定内容と「そりゃ」に後続する内容(帰結)は一致するものであり、「先行する想定内容=帰結」という関係が成り立つ。ただし本稿では、根拠の存在が明示的あるいは示唆される場合は「帰結」、そうでない場合は「想定」という表現を用いて言及する。例えば、(8A)の発話には「B

根拠を明示化したものとしては、(10B-a.)、(11B-a.)のような発話が考えられる。また、その根拠を(10B-b.)、(11B-b.)のように「そりゃ」と帰結である「知らない」「知っている」の間に挿入したり、(10B-c.)、(11B-c.)のように根拠のみを述べることも可能である。

- (10) A: 最近は図書館でCDが借りられるんだよ。知らないでしょ。
 B: a. そりゃ知らないよ。図書館に一度も行ったことがないんだもん。
 b. そりゃ図書館に一度も行ったことがないんだもん、知らないよ。
 c. そりゃ図書館に一度も行ったことがないんだもん。
- (11) A: 最近は図書館でCDが借りられるって知ってるよね。
 B: a. そりゃ知ってるよ。図書館でバイトしてるんだもん。
 b. そりゃ図書館でバイトしてるんだもん、知ってるよ。
 c. そりゃ図書館でバイトしてるんだもん。

以上の分析から言えることは、談話標識用法としての「そりゃ」は、ある根拠(P)に基づいて当然ある帰結(Q)がもたらされる($P \rightarrow Q$)という論理的構造を聞き手に喚起する働きを持つということである。これは論理関係を表す点で、談話標識の機能の①を満たしていると言える。(8)、(9)は、応答として帰結Qのみが述べられた場合で、(10B-c.)、(11B-c.)では、「当然Qだ」と言えるだけの根拠Pのみが述べられた場合であるが、どちらの場合も $P \rightarrow Q$ という論理的構造が喚起される。

次に③について見ていく。「そりゃ」は $P \rightarrow Q$ という論理的構造を喚起するが、この場合の根拠Pは、Qとなるということが当然とされるものでなければならない。例えば、(12B-b.)の返答のように、Pが偶然あるいはたまたま起こった場合などには不適切である。

- (12) A: この前行ったレストランが閉店したって知ってる?
 B: a. そりゃ毎日そのレストランの前を通ってるから知ってるよ。
 b. ??そりゃ昨日たまたまそのレストランの前を通ったから知ってるよ。

ここでは、たまたま通ったというのは、レストランが閉店したことを知ったことの根拠ではあるが、「当然Qだ」という根拠にはなり得ない。そのため、「そりゃ」の使用は不自然になるのである。なお、当然の帰結Qを導く根拠Pは、現実世界において妥当かどうかは重要ではない。極端に言えば、(12)において「レストランが閉店したことを知っている」という帰結Qを導く根拠Pは、例えば「私には知らないことなんてないから」でも良

は知らない」ことの根拠が明示されておらず、またその存在も特に示唆されるわけではないため、「Bは知らない」を「想定」という表現で言及している。一方、(8B)の発話では「Bは知らない」ことの根拠の存在が強く示唆されるため、「Bは知らない」を「帰結」という表現で言及している。

いのである。この例からも明らかなように、「そりゃ」は後続内容に対して、聞き手に否定の余地を与えない、話者の絶対的な確信をもって発話されるものであり、それゆえ話者はその発話に責任を持つことを伝えるものであると言える。これは、上で示した談話標識の機能の③にあたるものである。

以上をまとめると、「そりゃ」は、根拠Pに基づいて帰結Qが当然導かれる、 $P \rightarrow Q$ という論理的構造を前提とするものであり、根拠P、帰結Qのどちらか一方のみが述べられた場合であっても、根拠Pから当然導かれるような帰結Q、あるいは帰結Qが当然導かれるような根拠Pを聞き手に喚起するものであると言える。

最後に、④の機能について見ていく。④は、「相手の知識に関する発話者側の理解（知識）についての情報とそれに伴う発話の姿勢をマークする」（加藤 2001: 65）ものである。これは「そりゃ」の機能の根幹を成すものであると考えられるため、以下、この機能について詳しく見ていく。

ここまで挙げた例では、前提とされる $P \rightarrow Q$ の根拠Pが「そりゃ」の発話者によってもたらされるものであったが、以下のように根拠Pが相手の発話によってもたらされる場合もある。

- (13) A: 息子さんが一流の野球選手として活躍なさって、さぞかし嬉しいでしょう。
 B: a. そりゃ嬉しいよ。
 b.??そりゃ別に嬉しくないよ。

ここでは、Aは「息子が活躍すれば、Bは嬉しいだろう」という想定を持っており、Bはこの想定通り嬉しがっているため、(13B-a.)では「そりゃ」の使用は自然である。また、この反応は「親は自分の子供が活躍すれば嬉しい」という一般に想定される背景的知識とも矛盾しない。一方(13B-b.)では、Aの想定とは反対に、Bは嬉しがないため、「そりゃ」の使用は不自然である。

(14)の例では、Aは根拠Pしか提示していないが、「息子の活躍」という根拠Pと、「親は自分の子供が活躍すれば嬉しい」という一般的な想定から、「Bは嬉しい」という想定(帰結Q)を容易に導き得る。そのため、Aの発話には想定が明示的に発話されていないものの、(13)の場合と同様に、Aが持っているであろう想定と一致する(14B-a.)の「そりゃ」の使用が自然である。

- (14) A: 息子さんが一流の野球選手として活躍なさっていますが、どう思われますか?
 B: a. そりゃ嬉しいよ。
 b.??そりゃ別に嬉しくないよ。

さらに次の例を見てみよう。(15)では、(14)と同様、Aの発話には根拠Pから導かれる想定(帰結Q)が明示されていない。

(15) A: 息子さんとは昨年親子の縁を切られたそうですが、最近の息子さんの一流の野球選手としての活躍についてどう思われますか?

B: a. そりゃ嬉しいよ。(縁を切ったとは言え、実の息子だから)

b. そりゃ別に嬉しくないよ。(息子とは縁を切ったから)

(15)はこれまでに見た(13)、(14)とは異なり、Bが嬉しがっていないことを伝える発話((15B-b.))においても「そりゃ」の使用が自然である。ここでは、Aの発話の前半部分において、「Bは昨年息子と縁を切った」ということが述べられており、それは、「親は自分の子供が活躍すれば嬉しい」という一般的な親子関係に対する想定が成立しないことを暗に示唆するものである。(15B-b.)が自然となるのはこの想定に基づくもので、「そりゃ」に続く「嬉しくない」という帰結Qが自然なのは、Aの「Bは昨年息子と縁を切った」という発話とその根拠Pとなり得、そこから自然に導かれる「Bは嬉しくない」という想定(帰結Q)と一致するためであると考えられる。

(15B-a.)においても「そりゃ」が自然であることについては、次のような説明ができる。先ほど説明したように、確かに(15)におけるAの発話の前半部分には、(15B-b.)の応答を導く「Bは昨年息子と縁を切った」という根拠が示されている。しかし、Aの発話の後半部分には、(14)と同様に、「息子の活躍」という根拠も示されている。前半部分の「Bは昨年息子と縁を切った」ことを根拠とすれば、「親は自分の子供が活躍すれば嬉しい」という一般的な親子関係に対する想定は成立しないという想定(帰結Q)が可能であり、後半部分の「息子の活躍」を根拠とすれば、「親は自分の子供が活躍すれば嬉しい」という想定(帰結Q)が喚起される。つまり、(15)では2つの根拠が競合関係にあるのである。この場合、(15B-b.)で見たように、前半部分を根拠とすることが可能であることに加え、「たとえ縁を切ったとしても、子に対する親の愛情はそれほど簡単に切れるものではない」という状況が私たちの住む世界で見聞きすることがあるため、後半部分の「息子の活躍」も、(15B-a.)の「嬉しい」という帰結Qを導く当然の根拠Pとなり得る。前半部分の「Bは息子と縁を切った」と後半部分の「息子の活躍」のどちらが根拠となっているのかについて、聞き手は帰結が示されているBの応答から自然に理解することが可能である。

以上から、談話標識の機能の④「知識管理に関する理解の提示や確認」は、「そりゃ」において次のように実現されていると考えられる。(14)と(15)におけるAの発話には想定が明示されていないが、「そりゃ」の使用により、話し手は先行する想定があるものと見なしていること、さらに後続発話はその想定と一致するものであるということが聞き手に伝わる。想定が明示されている(8)-(13)の例も併せて考えると、談話標識の「そりゃ」

の発話は、(たとえそれが明示されていない場合でも) 想定を前提としていると言える。(14)、(15) では、想定が話し手だけでなく聞き手にも共有され得るものであると話し手が見なしているがゆえに、発話に明示されていなくともその想定を前提とすることが可能なのである。この「想定を前提とする」ということは、「そりゃ」の使用において、先に示した談話標識の機能の①～③の基本となる重要な機能であると考えられる。

以上の検討をまとめると、談話標識としての「そりゃ」の意味は次のように定義することができる。

(16) 談話標識としての「そりゃ」の意味・機能：

聞き手に対して、「そりゃ」に後続する帰結 Q が、「そりゃ」に先行する想定と一致することを伝えると同時に、後続の Q が当然帰結されるような根拠 P の存在を喚起する。

4. 終わりに

本稿では、まず「そりゃ」という表現に関する先行研究を概観し、「そりゃ」に補足語用法と談話標識用法の2つがあることを明らかにした。続いて、「そりゃ」の談話標識用法に焦点を当て、「そりゃ」が、それに後続する Q が先行する想定と一致することを伝えると同時に、Q が当然帰結されるような根拠 P の存在を喚起する機能があることを明らかにした。この「Q が当然帰結される」という当然性が、「そりゃ」が「当然 / もちろん」という話し手の態度、評価を表すことに繋がっていると考えられる。

ここで談話標識用法と、2節で見た補足語用法の関係を考えてみたい。「そりゃ」における2つの用法の共通点として、どちらも「話者の評価」がかかわるという点が指摘できる。しかし、談話標識用法の「そりゃ」が持つ「当然 / もちろん」という意味は、補足語用法とのつながりが見出しにくい。敢えて指摘するとすれば、「そりゃそうだ」という表現が補足語用法と談話標識用法をつなぐ表現になっているのではないかという点である。「そりゃそうだ」は、補足語用法であると同時に、談話標識用法に特徴的な「当然」という意味を持つことから、補足語用法と談話標識用法の繋がりを考える上での手がかりとなるのではないかと考えられるが、この点については今後検証する必要がある。

また、歴史的には、補足語用法の「そりゃ」が談話標識用法よりも先に生じたと推測される。¹⁰ これら2種類の用法が関連するものであると仮定した場合、Traugott (1982) で提案された「propositional → textual → expressive」という意味変化の流れに沿う形で、補足

¹⁰ 例えば、『日本国語大辞典(第二版)』において、補足語用法の記述、用例はあるが、談話標識用法の記述、用例が見られなかったことからこのように推測される。

語用法の「そりゃ」が談話標識用法へ拡張したと考えられる。

また談話標識用法の「そりゃ」は、補足語用法と比べて「話し手の態度や視点を表示した表現」である「主観的表現」(Traugott 2010: 32)であると言える。¹¹さらに、「そりゃ」の原形である「それは」の補足語用法と、縮約形「そりゃ」の補足語用法を比べると、述部に話者の感情が表出される縮約形「そりゃ」の方がより主観的であると言える。

補足語用法と談話標識用法の「そりゃ」の間にどのような繋がりがあるのかを明らかにするためには、通時的な研究が必要となる。本研究は、そのような通時的研究の土台を提供するものである。

参考文献

- Brinton, Laurel J. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 深田 智. 2001. 「“Subjectification” とは何か：言語表現の意味の根源を探る」、『言語科学論集』、7、61-89、京都大学。
- 浜田麻里. 1993. 「ソレガについて」、『日本語国際センター紀要』、3、57-69、独立行政法人国際交流基金。
- 飛弾村 遥. 2005. 「指示詞と接続詞のかかわり再考——「それ+で」から「それで」への連続性」、『立教大学ランゲージセンター紀要』、14、3-20。
- 庵 功雄. 1995. 「ソノ N とソレ」、宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）』、632-637、東京：くろしお出版。
- 庵 功雄. 2007. 『日本語におけるテキスト結束性の研究』東京：くろしお出版。
- Jucker, Andreas H. and Yael Ziv. 1998. “Discourse Markers: Introduction.” In Jucker and Ziv (eds.) *Discourse Markers: Descriptions and Theory*, 1-12. Amsterdam: John Benjamins.
- 加藤重広. 2001. 「照応現象として見た逆接——「しかし」の用法を中心に——」、『富山大学人文学部紀要』、34、47-78。
- 川瀬生郎. 1992. 「縮約表現と縮約形の文法」、『東京大学留学生センター紀要』、2：1-24。
- Langacker, Ronald W. 2006. “Subjectification, Grammaticization, and Conceptual Archetypes.” In Angeliki Athanasiadou, Costas Canakis, and Bert Cornillie (eds.) *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*, 17-40. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法（改訂版）』東京：くろしお出版。
- メイナード・泉子・K. 2004. 『談話言語学——日本語のディスコースを創造する構成・レトリック』

¹¹ Traugott の言う subjective（「主観的」と訳されることが多い）は、Langacker（例えば Langacker (2006)）の言う subjective（「主体的」と訳されることが多い）とは異なるものであることに注意されたい。Traugott が subjectivity（主観性）を、表現の概念内容に関する問題であるとする一方、Langacker は subjectivity（主体性）を、概念化する主体と概念化される客体との関係における視点の問題であるとしている。この点に関しては、深田（2001）や澤田（2011）で詳しく論じられているので、そちらを参照されたい。

- ク・ストラテジーの研究』東京：くろしお出版。
- 小川典子. 2010. 「指示表現から談話標識へ——「こりゃ」「そりゃ」「ありゃ」を事例として——」、『言語科学論集』、16、43-56、京都大学。
- Onodera, Noriko. 2004. *Japanese Discourse Markers: Synchronic and Diachronic Discourse Analysis*. Amsterdam: John Benjamins.
- 小野寺典子. 2011. 「談話標識(ディスコースマーカー)の歴史的発達——英日語に見られる(間)主観化」、高田博行(他編著)『歴史語用論入門』、73-90、東京：大修館書店。
- 澤田治美(編). 2011. 『主観性と主体性』東京：ひつじ書房。
- Schiffrin, Deborah. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子(編著). 2011. 『歴史語用論入門』東京：大修館書店。
- Traugott, Elizabeth C. 1982. "From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-pragmatic Aspects of Grammaticalization." In Winfred P. Lehmann and Yakov Malkiel (eds.) *Perspectives on Historical Linguistics*, 245-271. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth C. 1995. "Subjectification in Grammaticalization." In Deier Stein and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivization*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C. 2010. "(Inter)subjectivity and (Inter)subjectification: A Reassessment." In Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens (eds.) *Subjectification, Inersubjectification and Grammaticalization*, 29-71. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Traugott, Elizabeth C. and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

辞書・コーパス

- 『日本国語大辞典』第二版. 2000. 東京：小学館。
- 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』1995. 東京：新潮社。